

第三編

各国における富と繁栄の伸び方の相違について

第一章 富と繁栄の自然な発展

文明社会で最も大きな取引は都市と農村のあいだにある。その中身は、一次産品と製造品の交換であり、現物どうしの交換だけでなく、貨幣や手形などの紙の証券を介した売買でも行われる。農村は都市へ食料と製造の原料を供給し、都市はその代わりに製造品を農村へ返す。都市は食料や原材料を自分で再生産できないため、その富と生活の糧は根本的に農村に依存している。しかし、都市の利得が農村の損失だという見方は誤りである。分業は双方と、各々の職に従事する人びとすべてに利益をもたらすからである。農村の人びとは、自分で作れば多くの手間がかかる品を、より少ない自らの労働の産物と引き換えに、都市から多く手に入れられる。都市は、耕作者の生活維持に必要な量を超える余剰に確かな市場を与え、農村はそれを需要の高い別の品へ交換する。都市の人口と購買力が大きいほど販路は広がり、市場が広がるほど利益はより多くの人びとに行き渡る。都市では、近郊で収穫された穀物も二十マイル離れた土地の穀物も、同じ価格で売買される。ただし遠方の穀物には、栽培費に運送費と通常の利潤が上乗せされるのが通例である。したがって都市近郊の地主や耕作者は、通常の利潤に加え、遠方からの

運送費に相当する分を販売価格でそのまま得られ、購入の際にもその分だけ有利になる。規模の大きな都市の近郊と遠方の耕地を比べれば、この取引が農村にもたらす利益の大きさは明らかである。貿易差額については様々な説があるが、都市と農村の取引で一方が損をするという主張は見当たらない。

本来、暮らしの糧は、便利さやぜいたくに先立つ。ゆえに、その糧を生む産業は、便利さやぜいたくに応じる産業より先に発達すべきである。したがって、生活を支える土地の耕作と改良は、便利さやぜいたく的手段にすぎない都市の拡大に先行するのが筋である。都市の生計は農村の余剰生産、すなわち耕作者の生活維持に必要な分を超える部分だけで賄われるため、余剰が増えないかぎり都市は大きくならない。もともと、その糧がつねに近隣や同一の領域から供給されるとは限らず、遠方の国々から届くこともある。これは原則に反するものではないが、時代や国によって富と繁栄の伸び方に大きな差異をもたらしてきた。

概して、必然がもたらす秩序は、人の自然な傾向にも支えられる。人為的な制度がこの傾向を妨げなければ、都市の成長は周囲の耕作と改良が支え得る範囲を超えず、少なくとも地域全体が十分に耕され改良されるまでは抑えられていたはずである。利潤が同

等かほぼ同等なら、多くの人は製造業や対外貿易よりも、土地の改良と耕作に資本を投じるだろう。土地に資本を置く者はそれを手元で監督できるからである。これに比べ商人は、遠国で相手や事情を十分に知らぬまま巨額の信用を与え、資本を風や波、さらには人の愚行や不正義といった不確かなものに委ねざるをえない。地主の資本は土地改良に固定され、人間社会が許す範囲では最も安全に保たれているように見える。加えて、田園の美しさと農村生活の楽しみ、そこで得られる静かな心、そして法の不正に乱されないかぎりの実質的な独立は、誰にとっても大きな魅力である。人はもともと耕作を最初の務めとしてきたゆえ、生涯のどの段階でもこの営みへの愛着を保ち続ける。

土地の耕作は職人の助けなしには不便が多く、しばしば中断を免れない。農家が日常的に頼るのは、鍛冶や大工、車輪工・鋤工、石工やれんが職人、製革職人、靴屋、仕立屋などである。こうした職人どうしも互いに助けを要し、農民と異なって一定の土地に縛られないため、自然に近接して住み、小さな町や村が生まれる。そこに肉屋、醸造家、パン屋が加わり、折々の需要に応える多様な職人や小売も集まって、町はいよいよ大きくなる。町と農村の住民は互いに相手の奉仕者であり、町は常設の市場として、農村の人びとが未加工の産物を製造品と取り替える場となる。この商いが町の住民に仕事

の原料と生活の糧を与える。彼らが農村に売る完成品の量が、彼ら自身が仕入れる原料や食料の量を定める。ゆえに町の雇用も生計も、農村の完成品需要の拡大に応じてしか増えず、その需要の伸びも、耕地の改良と耕作の広がり按比例して起こる。結局のところ、人為の制度が自然の趨勢を乱さなければ、どの社会でも、町の富と人口の増加は、その領域における改良と耕作の進展と歩調を合わせて進んだはずである。

英領北米の諸植民地では、未開の土地がまだ安く手に入るため、遠い市場向けの本格的な製造業はどの町にも根付いていない。職人が近隣の田園向けの商いに必要な資本を少し上回る額を蓄えても、遠方販売のための工場を興すのではなく、未開地を買って開墾し、やがて自作の農園主（プランター）へと転じる。ここでは、職人に約束される高い賃金や気楽な暮らしでさえ、他人に雇われず自営を選ぶ気持ちを変えさせるほどの誘惑にはならない。彼にとつて、職人は生計を支える顧客に仕える立場であるのに対し、自分の土地を耕し家族の労働で暮らす農園主こそ真の「主人」であり、誰にも依存しない独立者なのである。

これに反して、未開地がない、または安くは手に入らない国では、近場の臨時仕事に充てる分を超える元手を持つ職人は、広い販路を見据えて製造に乗り出す。鍛冶は製鉄

や金物の工房を、織工は亜麻布や毛織物の工場を設ける。こうした分野では時がたつにつれて分業が進み、工程が細かく分かれ、その結果、さまざまな改良が積み重なって洗練されていく。この発展の道筋はほぼ自明なので、詳述は省く。

資本の行き先を選ぶにあたり、利潤が同等か近いなら、農業が製造業に優先されるのと同じ理由で、製造業は対外商業より選ばれやすい。地主や農民の資本が製造業者の資本より安全であるように、製造業者の資本も、つねに自分の監督と統制の下に置きやすいぶん、外国商人の資本より安全である。しかし、いつの時代でも、国内で需要のない一次産品や製品の余剰は、需要のある品と交換するため国外に出さざるを得ない。その輸出を担う資本が外国のものか自国のものかは本質ではない。社会がまだ、国土の耕作と一次産品の十分な加工の双方を賄えるだけの資本を蓄えていない段階では、原料の輸出を外国資本に任せる利点は大きく、そのぶん自国の資本をより有益な用途に回せるからである。古代エジプト・中国・インドの繁栄は、輸出の多くを外国人が担っていても国が大いに栄えうることを示しているし、北米および西インドの植民地の発展も、余剰輸出に自国資本しか使えなかったなら、もっと緩やかなものにとどまったに違いない。

自然の成り行きでは、成長途上の社会の資本の大部分は、まず農業に向かい、次に製

造業へ、最後に対外商業へ回る。この順序はきわめて自然で、領土をもつ社会なら程度の差こそあれ一貫して見られる。都市が成り立つには耕作が先にあり、対外商業に本格的に踏み出すには、その前段階として都市の内部で初歩的な製造活動が営まれていなければならぬ。

もっとも、この自然の順序が各社会である程度働いていたとしても、近世ヨーロッパの諸国家では、多くの点で大きく逆転した。いくつかの都市が展開した対外商業が、遠い市場向けの高度な製造業を取り込み、製造と貿易の相乗作用が、かえって農業の主要な改良を先に押し進めたのである。こうした不自然で逆行する歩みを生んだのは、初期の統治体制の性格が植え付け、制度が大きく改められた後も残った作法や慣習であった。